

モラルサイエンス研究会（令和2年7月1日）発表要旨

最高道徳の原理の検討①

—課題の共有—

教育研究室

教授 宗 中正

新型コロナウイルスを通して、私たちは、人間が死すべき（mortal）存在であると同時にかけがえのない（irreplaceable）存在であることの葛藤をどのように受け止めていくか、という課題を与えられている。また、米国に端を発し、多くの国々に広がった人種差別に対する抗議活動は、現在起こっている問題としてだけでなく、過去にさかのぼって、私たち人類が、多くの差別を経験して現在に至っていることを浮き彫りにした。この問題をどう受け止め、どう克服するかは、人類全体にとって大きな課題である。

人類がこの地球上で互いに、また自然や他の生物と調和して安心と平和と幸福を得るにはどうすればよいか、という問いを立てた廣池千九郎は、人間が宇宙の現象の一つであり、それ故に、宇宙の法則に適応して生きる必要があると述べた。また、そのためには、人間が進化の過程で生存のために必要としてきた、他を排して自己の生存を図る競争の原理を超えて、全体としての調和を可能にする原理へと進む必要を述べ、そのためには、あらゆる差別心を超えた愛や慈悲の精神をより広く共有する必要があることを示し、広く人類に呼びかけた。このような宇宙現象と人類全体の調和を目指す道徳を廣池は最高道徳と呼び、最高道徳論として提示している。

廣池ののち、時に近年、人類学、進化科学、脳科学、心理学などの成果により、道徳の研究は大きな進歩を遂げてきている。今後は、廣池が提示した最高道徳論の内容を整理し、その課題を明確にして検討を加えることで、現代の倫理道徳研究との課題の共有を図ると同時に、最高道徳論の学習の体系化と充実につなげたい。